

---

# 劣化の魔術師

カワウチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

劣化の魔術師

### 【Zコード】

N4305BA

### 【作者名】

カワウチ

### 【あらすじ】

夏休みのとある日に、古川大河は、熱中症で倒れた所を灰色のロープを身にまとった少女・シノに助けられる。

シノは自分の事を、魔王の娘と名乗り、異世界から逃げてきたと大河に告げる。

大河は助けてもらつた恩返しに、シノのこちひらの世界での生活をサポートする役目を申し出るが……

## プロローグ

中学生になつて二一度目の夏休みが始まって一週間。

本来なら、これから一か月ちょっと続く長期休暇に胸を躍らせていたはずのこの時期を実際迎えてみると、驚くほどにテンションが低かった。

夏休み開始一週間で此処までテンションが低いのは、恐らく初めてのことだらう。

公園のベンチでため息をつきながら自分の左足を見る。

包帯にグルグルに巻かれたギプスと手元に置かれた一本の松葉杖。これを見れば誰だって俺がどういう状況に置かれているか分かるだろう。

骨折。原因は後先考えずに行つた馬鹿な行為。

学校の急な坂を自転車で疾走していた所、自転車がパンクして身を放りだされた。

そのまま何の受け身も取れずに地面に叩き付けられ、左足を骨折。こんな事をしておいて骨折で済んだのは不幸中の幸いだが、不幸な事に変わりはない。

中一は人生で一番馬鹿な時期と言つるのは、強ち間違つていないようだ。

ちなみに何故運動もできない俺が公園のベンチに座り込んでいるかというと、これまた面倒くさい事情があつたりする。

「くつそ……まさか幸運が不運に移り変わるとはな……」

先週から両親が海外出張、そして姉さんは海外にホームステイ中の為、俺は悲願の一人暮らしとなつた。

親や姉さんが居ると何かと制約が多い。あの時の俺は、自由な夏休みを目の前にして、一人ガツツポーズをしていた。

が、実際夏休みに入つてみればこのありますまだ。

少々家から遠い接骨院への移動は、両親が居ないため車が出せず、慣れない松葉杖を使って炎天下の中を歩かなくてはならなくなつた。

今は帰りだから少々気楽だが、行きの時はこの距離を報復しなくちゃいけないという絶望感に頭を抱えた。

両親が居なくなつて喜んでいたあの日の自分を殴りたい。

そんなわけで、中間ポイントである公園で、途中休憩の為にベンチに座つてゐる。

それにしても最近の小学生は外で遊ばないのだろうか。三時前公園には誰もいない。

ついさつきまでジョギングしていた爺さんがいたけど直にどこかへ行つてしまい、公園に残つてゐるのは俺一人。

「……しても今日も熱いな……」

今日最高気温三十五度だつて。こんな炎天下の中外に居続けたら、今度は熱中症で内科の世話になることになる。

変な幻覚とかを見る前に、早めに帰つた方がいいかもしれないな。

残りの距離を歩く覚悟を決め、松葉杖に手を伸ばしたその時、

「……え？」

俺は目に映つた不思議な存在に呆氣をとられて、伸ばした手をひっこめた。

樹木の死角となつてゐる所から、同年代位の少女が姿を現した。

ショートカットの、とても可愛い女の子だつたが、それだけでは呆氣にとられたりなんてしない。

なんというか奇抜だつた。

まるでRPGで魔道師が着ていそうな、灰色のローブを身にまとつてゐる。

どう考へても日本で普段着として着る様な服ではないし、それを置いといても夏に切れる様な服ではないはずだ。

「これ……やつちまつたかな……」

熱中症で幻覚見るんじやないか？ こんなの絶対おかしいだろ。

いや、熱中症でこんな幻覚は見ねえか。よく分かんねーけど。

「…………そろそろ帰るか」

本当に熱中症にでもなつたりしたら面倒だ。

今度こそ松葉杖を手に取る。

使い始めて間もないからだと思つたが、どうも使いこなだみなこれ。まあこれがなきゃ歩くことも出来ないから使うけどや。

松葉杖を使い立ち上がり、公園の出口に向かって歩きはじめる。

さて、残り四分の一の距離。頑張って歩きますか。

そう意気込んで、一步一歩と前に進む。

慣れない松葉杖を駆使し、数歩歩いたところで俺は立ち止まった。

「あれ…………んだこれ…………」

急に強いめまいが俺を襲い、視界がぐるぐると回った。

これって…………マジで熱中症…………。

バランスを崩した俺の体は、そのまま地面へと倒れ伏す。

覚えているのはそこまでだった。

## 口算のプロローグ 非口算のプロローグ

後頭部に柔らかい何かに乗っている。

枕つてこんなだったか？ ていうかなんで俺、寝てるんだつけ。

そうだ……たしか家に帰らうと思つて……熱中症で倒れたんだ。

重たい両蓋を開く。

すると、あの奇抜な服装の少女が目に映つた。

「あ、大丈夫ですか？」

俺の顔を覗き込んでそう言つた少女は、びくかほつとした感じで続ける。

「急に倒れたんでびっくりしましたよ。大事に至らなくて本当に良かったです」

此処が病院ではなく、公園の日陰な所を見ると、この子が看病してくれたと考えて間違はないだろう。

さつき幻覚扱いしたのを謝りたい。本当に悪かった。

といひの柔らかい感触はなんなんだろ？

冷静に考え始めると、数秒で答えが導き出された。

「「うおああつー！」

自分でも良くなき声を上げて起きる。

柔らかい感触の正体は、少女の腿。つまり膝枕。

「「」「」めんー！」

俺が本能的に謝ると、少女は首を傾げて、

「どうして謝るんですか？」

と、聞いてくる。

どうしてっていわれてもなあ。

とりあえず膝枕の事は一旦置いておこう。なんか気まずくなる。

「あ、ありがとな。おかげで助かったよ」

俺を看病してくれた少女に、感謝の意を表す。

「はい。私の回復魔術が役に立つて良かったです」

「はい、ちょっとストップ」

え、何？ 回復魔術？

「え？ 私変な事言いましたか？」

「やっぱ自分の発言を思い出してみる。なんだよ魔術って」

恩人にこんな事を言ひるのはなんだけど……」Jの子……アレだろ?

「魔術は魔術ですよ」

当たり前のよう言ひつ少女。

「ああ、確定だわ。」Jの子厨二病だ。それも結構重症な。

「あの、助けてもらつた奴にこんな事言つのもなんだけどさ、人前で魔術とかありもしない様な事を言わない方がいいぞ」

死ぬからな、社会的に。

「ありもしないって……魔術はありますよ」

まだ言つか。これは本格的にヤバいんじゃないか?

「じゃあよ、見せてみろよ、その魔術つて奴を。そつすりや信じてやるよ」

大体Jの手の奴は、Jのついた状況に陥つた時Jのつらしげ。

Jの力は人前で使つてはいけないと、今日は調子が悪いとか。

Jの少女は、魔術で俺を助けたと言つてゐるから、前者はないだろ。

おそらく後者の様なパターンで逃げるに違いない。

「わかりました。じゃあ見せてあげますよ。私の魔術」

「アレ? 見せねておこ……出来もしない事を宣言しておこでどうある気だ?」

「うーんと、何を使いましょうか……あ、そつだ

少女は俺の左足を指差す。

「「」の左足の怪我を治しまじゅうか?」

「治すつてお前……これ骨折だぞ? そつ簡単に治るわけねーだろ

「その位だつたら一十分もすれば治りますよ」

少女がそつこつと、俺に向かつて掌を突き出す。

治るわけねーだろ。

心の中でやう吐き捨てて、少女が言い訳を始めるのを待つ。

「じゃあ、始めますよ」

少女がそういうと、少女の足元に黄緑色の魔法陣の様な物が展開される。そして間髪開けずに、俺を中心同色同型な物が展開され、それと同色の光の粒が、螢の群れの様に空へと上がっていく。

「……あ、うん。分かったよ」

俺は呟くよ。ついでにいつに書いた。

「魔術の存在、認めてくれましたか？」

「今、俺は夢を見てるんだ。きっと本当の俺は病院で点滴でも受けているに違いない」

だつてそうだろ？ こんなのが現実な訳がない。

「あんまりそんな事ばかり言つてると私、拗ねちゃいますよ？」

少女がなにか言つてゐようだが、ぢつともいい。これは夢の話だ。さつさと頬をつねつて現実へと戻ろう。足が治るなんて夢を見ても、起きてからが辛いだけだ。

右手で頬を摘み、つねり上げる。

「ぢつですか？ 夢からは覚めました？」

「……」じいが現実でした

一分間ほど粘つてみたが、全くもつて冷める気配など無かつた。

じゅやら本当に現実らしい。

あれだけの痛みを感じたのにも関わらず、俺の足元には黄緑色の

魔法陣のよつたな物が展開されている。きっと魔法陣なのだろ。

魔法陣の外周あたりには、みたことの無い言語が並んでいる。呪文だつたりするのだろうか。

「じめん、いろいろ疑つたりして。魔術の存在、認めるよ」

もう二つなら認めるしかない。

確かに魔術なんて夢の様な話だけど、確かに目の前で夢の様な事が現実に起きているんだから。

「分かってくれたらそれでいいです。別に怒つたりしてませんから」

笑つてそう言つ少女。

なんかすげえ良い奴だな。

「それにしても……まさか魔術なんてもんが実際にあるなんてな。ビックリだよ」

存在を認めてみると、なんか非常に興味が沸いてきた。

「なあ、魔術つてどうやつたら使えるんだ? 教えてくれよ

「残念ですけど、人間に魔術は使えませんよ。魔術は悪魔の使う術と書いて魔術です

えーっと、つまりだ。この子の言つている事が正しかつたとする  
と、この子は……。

「それじゃあお前が悪魔って事になっちゃうんだが……流石にセ  
れは無いよな?」

流石にそれは無い……よなあ。

でも魔術だつてあつたし、その仮説を否定しきれない。

「いいえ、私は悪魔です。この世界とは違う世界。いわゆる異世界  
つて所から来ました」

本来な絶対信用しない様な話だが、魔術なんてもんが存在してい  
ると知つた今、もう何が正しくて、何が間違つてているのかが分から  
ない。

魔術があるんだから……人間そつくりな、異世界出身悪魔だつて  
……居るよな?

「でもお前、どうからどう見ても人間にしか見えないんだけど。悪  
魔つてみんなそつうなのか?」

悪魔つて、てつきりRPGのモンスターみたいな感じだと思つて  
たんだけどな。

「悪魔は悪魔としてのランクが高いほど、容姿が人間に近くなるん  
です」

ランクが高いほどつて事は、人間そのものみたいな容姿をしてい  
るこの子は相当凄い奴なのか?

悪魔で一番ランクが高いって言つたら……まあ魔王だらうな。

でもそんな奴がこんな所をうろついているとは思えないし、いわゆる四天王的な奴なのかな。

「あ、自己紹介がまだでしたね。私はシノつて言います。えーっと……魔王の娘です」

「魔王の娘！？」

予想を遥かに上回つたなオイ！

「驚きました？」

「まあ……魔術の存在を知つた時位には」

魔術なんてもんを見たせいで、ある程度の事では驚かない自信があつたけど……これは流石に許容範囲を超えてるな。

魔王の娘つて……超大物じやん。

「えーっと、あなたの名前はなんて言つんですか？」

唐突にそんなことを聞かれた。

まあ自己紹介をされたんだから、こつちも名乗るのが常識か。

「俺は古川大河。よろしくな」

「はい。じゅうじょよろしくお願ひします、大河さん」

た、大河さんって……名前呼びかよ。

女の子に名前を呼ばれることなんか無かつたから、嬉しいのか……恥ずかしいのか。よく分かんねえ。

「えーっと……なれなれしかったですか？」

「いや、そんなことない。大河でいいよ大河で」

その方が断然いいに決まっている。

にしても魔王の娘ねえ。とてもそういうとは思えないな。

悪魔つてのはもつと極悪非道なイメージがあるけど、シノからは微塵もそんな雰囲気は感じられない。

普通に可愛い女の子って感じしか……しないんだよな。

「でも、なんで魔王の娘なんてすぐえ奴がこんな所をぶらついてる訳？」

ふと浮かんだので聞いてみる事にした。

「駄目なんですか？」

「いや、ダメじゃないけど、一応身分が身分だから、特別な理由でもあるのかなって」

俺がそう聞くと、シノは黙りこむ。

やつぱり何か言えない特別な理由があるのだろうか。

またかこいつちの世界を侵略してきたとか……ってそりゃねーか。

シノがそんな事をすることは思えない。

勝手に考察していると、シノが沈黙を破つた。

「私は……逃げてきたんですよ」

「逃げてきたって……なにか嫌な事でもあつたのか？」

「……基本的に嫌な事しかないですよ」

シノは俯き、呟くように続ける。

「殆どの魔物は……人間を殺して世界を取ることしか考えていないんですよ。そんな気が無い私が、そんな中で生きるのって……どれだけ辛いか分かります？」

なんだよそれ……そんなの辛いってレベルじゃねえだろ……。

シノに人を殺す気はない。でも周りの連中は殺す。

それってつまり、平和主義の一般人が、テロリストの一昧の中に居る様なことだよな。

しかも魔王の娘なんて重荷を背負わされて。

「お前……そんな中で一人ずつと耐えてきたのか？」

「いえ、一人だったのはちょっとの間だけですよ……本当に少しの間だけ。私はそれが耐えられなくてこっちに逃げてきたんです」

それってつまりどういってことだ？

ちょっとだけってことは、シノの周りには仲間がいたのか？ それが一人になつたってことは何かあつたのか？

俺がシノの言葉の意味を必死に探つていると、シノがその解を語り始めた。

「私には……双子のお兄ちゃんが居るんです。人間と戦うのに乗り気じやない私を、周りの悪魔から守つてくれたお兄ちゃんが」

兄つてこうと……魔王の息子つてことになるのか。

「お兄ちゃんも人間を嫌つてませんでしたし……まあ私と違つてお兄ちゃんは世渡りが上手かつたですから、他の悪魔の前でそんな素振りはみせませんでしたけど」

懐かしそうに語るシノだが、ここで少し間が空いた。

「なにか辛い事があつたんだうつなと言つことは、俯いたシノの顔を見れば直に分かる。

「でも一か月前、突然お兄ちゃんがいなくなつたんです」

「いなくなつたつて……まさか死んじまつたとかじや」

「そんなわけないです！」

シノは感情的になつて叫ぶ。

「そんなわけ……ないですよ……」

涙をこじらながら震えた声でしゃつぱつシノ。

「悪い。魔王の息子だつたら……そう簡単に死なないよな」

シノは黙つて頷く。

「その兄貴がどこにいるか分かるのか？」

シノは口を開いたまま答えようとしない。

「多分知らないだろう。知ついたらもう少し違つた反応を見せるはずだ。

「じゃあ、どうしていなくなつたのか、知つている奴いなかつたのか」

「……父や、その周りの悪魔達は、みんな知つてゐる雰囲気でした。でもみんな知らないふりをして教えてくれませんでしたよ」

それつて、そいつらがシノの兄貴を……いや、仮にも魔王の息子だぞ？ 自分の後継者を消す様な事を、魔王がするとは思えない。

「それで、兄貴がいなくなつたから、そつちの世界に居られなくな

つたつて事が

「……はー」

そう言つてシノは頷く。

支えだつた奴がいなくなる。支えがあつても辛い様な場所で、その支えなしで生きていくなんて不可能だらつ。

一か月前に消えたつて事は、もしシノがこっちの世界に来たのが昨日今日の話なら、一ヶ月間もその環境に居たことになる。

多分本当に昨日今日の話なんだら、この服装で町を出歩いていれば、少なくとも噂ぐらにはなつているはずだ。

やっぱり一ヶ月近くあの環境に居たつて事なのだろうか。

「それで、じつちの世界に来たすぐに大河さんが倒れるといつを見て、今こいつしているわけです」

本当に一ヶ月もそんな所に居たつてのかよ。考えただけでゾッとするな。

「それで、お前はこれからどうすんの? これから的事とか考えてんのか?」

俺はシノにそう尋ねた。

出来ればこの子の力になつてあげたい。俺にできる事ならやつてしまおや。

恩人にこんな話されたら嫌でも助けてやりたくなつてくる。

「IJたちの世界の事は、悪魔がない世界つて事ぐらいしか知りませんから、どうすればいいかなんて分かりません。まあ、まず寝床を探さなくてはいけないって事位は分かつてますけど」

本当にどうするつもりだ？

世界が違えば通貨も違つだらうし、寝床だけではなく、食べ物にありつけるかどうかも分からぬ……いや、分かる。無理だ。

普通の家出ならともかく、異世界からの家出となると、ハードルが高いな。

俺はこの子の協力に何ができる。

寝床探し……んなもん直には思いつかねえし、なんかねーかな。

「あ、そうだ」

寝床提供！ これどうだ？

家には誰もいないし、女の子一人ぐら<sup>イ</sup>止めても問題ない……わけ無いよなあ。

男友達を止めるのとはわけが違う。

それってつまり、女の子と一つ屋根の下つて事だよな。いろんな意味で大丈夫なのがこれ。

でもまあ、俺にできんかんな事つてこれ位しかないしな。

「とつあえず、俺ん家の部屋空いてるけど……使ひっ。」

なんか凄い緊張したが、なんとか聞けた。

「え？ いいんですか！」

「まあ、足の事もあるし……なによつこいで放つておいたら心配で  
しょつがないつづーか」

「じゃあ……お願いして良いですか？」

とつあえず、異性が泊まるといつ点以外は何の問題も無い。

さつきシノに言つた通り部屋は空いてるし、金だつて結構な額が  
生活費として送られてきてる。通院費だつてもう必要なくなつた  
し、一人分の食費が増えた位問題ない。

「おひ、大丈夫だ。歓迎するぜ」

「あ、ありがとひやひこますー。」

やつぱ女子に感謝されるつていいもんだな。思に切つて提案し  
て良かつた。

「それじゃあ……よろしくお願ひします、大河さん」

「いひひひひ。よろしくな、シノ」

そう返した俺の足元に展開されていた魔法陣が、徐々に薄くなつて消滅した。

治療が終わったのだろうか。

「終わりましたよ。もう普通に立つても大丈夫なはずです」

「お、マジで？」

久しぶりに両足を使って立ち上がる。

痛みは無い。久しぶりなので違和感があるが、確かに足が治つている。

「すげえ……本当に治つた」

やつぱり魔術って凄げえよ。本当に漫画みたいだ。

「どうですか？ 足の調子は」

「元通りだよ。本当にあつがとな

「どういたしまして」

シノは笑つてそう言つた。

「じゃあ、とりあえなくは熱いし、さつさと俺ん家に行こいつだ」

「はーー。」

「元気よく歩き回ったシノは今へと立ち止まる。

「あ、それこそええ、俺の松葉杖は？」

使わないことはいいえ、病院の借り物だ。ちやんと持つて帰らねば。

「あ……起きあはなしです。すこません」

「マジで？」

「……すこません」

まあ責めたりはしねえけどよ……せいか誰かに取られたりしてないだろ？

「とつあえず松葉杖回収して、家に向かつか」

「はい……残つてると良いですね、松葉杖」

残つていないと困るんだが。

ちやんと松葉杖が残つてゐる事を祈りながら俺達はその場を離れた。

## 初めての日本文化

どこかの親切な人が落ちていた松葉杖をベンチに立てかけてくれていたらしく、直に見つけることが出来た。

しかしあ、しつかりと両足で歩けるのに松葉杖を持つているつてのも不思議な光景だ。

そんでもって俺の隣には不思議な服を着た悪魔の少女が居る。

すれ違った人が、不思議そうな目で見てくるのも、この服装が原因だろう。

とりあえ服装をなんとかしないとか考えつつしばら歩いていると、自宅が視界に入った。

松葉杖の頃と比べると大幅なタイム更新だ。改めて治つてよかつたと痛感するな。

「よし、着いたぞ」

何処にでもあるような一軒家。それが俺の家だ。

「さ、入れよ」

「お邪魔します」

そう言って家の中に入ったシノは、なんだかウキウキはじめた。

あれだろ。引っ越したりしたときには、目新しい新居をみてテンションが上がるのと同じだろ。

俺も小三の時に此処に引っ越ししてきた時に、目新しいこの家を見てテンションが上がったもんだ。

普通の引越しであれだけテンションが上がったんだがら、異世界から来たシノはもつとすごいに決まっている。住宅事情も違つてゐるだろ？、目新しいだろ？

「私の居た世界と随分と違いますね。凄いです

」「普通の間取り。」「普通の家具なのだが、やはり珍しい物は凄く感じるのが人間だ。いや、シノは悪魔か。

「まあとつあえずあがれよ」

玄関で靴を脱ぐと、シノは不思議そつて、

「」イハヒの世界では靴を脱いで生活してゐんですね

「まあ国こもよゐだぞ、日本じゃこんなもんだよ」

そう返して家に上がり、とつあえず居間に足を運び、部屋の隅に松葉杖を置く。

明日あたりに返しに行へか。もう必要ないし。

どうやって説明しようかな。急に治つたなんか説明出来ねーぞ。

「あ、その辺座つて」

まあこの事は後々考えて行こう。それより今はシノの事が先決だ。

「今お茶入れるから」

そう言つて隣の大所に向かう。

茶葉とお湯を急須に入れ、湯呑に注ぐ。

お茶菓子も一応用意するか。ちょうど来客用の羊羹も有るし

この前食べただけど、おいしかったなコレ。

多分喜んでくれるだろ?……多分。

なんかシノの服装を見る限り、和風ではなく洋風の文化が広がつていそうだから、こういうのは口に合わないかもしれない。

ま、今家に有るのはこれだけだから、どうしようも無いんだけど。

それらをお盆に載せ再び茶の間へ戻った。

「お待たせ」

テーブルに一人分の茶碗と羊羹を置いて、シノの対角線上に腰を下ろす。

「えーっと、これは?」

ああ、シノの世界には煎茶や羊羹が無いのか。勿体ないなあ。

「煎茶と羊羹。うまいから食べてみろよ」

—あ、はい

もう誰もシノは羊羹を口に運ぶ

— あ、毎日おしゃべりです！

シノの顔か  
無邪気な子供の様な笑みを浮かべる

の、やう甘い物が好きみたいだな

女の子は甘党が結構多いみたいだけど、どうやらそれは悪魔も同じ。

「そりや良かった。あ、煎茶も飲んでみるよ。おいしいから」

俺が進めると、シノは湯呑を両手で持ち、

「それにしても、黄緑色の飲み物なんて初めて見ましたよ」

不思議そうに煎茶を眺めたシノは、恐る恐るといった感じで、煎茶を啜る。

「あれ……おこしいですね」

どうやらこちらも好感触だつたらしい。

「気に入ってくれたなら良かつたよ」

笑つてそう言ひシノに、俺は笑つてそう返した。

「そ、ついえばさ」

お茶を飲んで一段落すると、色々と疑問が浮かび上がってきた。

「お前つてさ、異世界から逃げてきたんだよな」

「はい、そうですけど」

「追つ手とか来ないわけ？」

仮に悪魔が追つて来ようものなら、バトル漫画の様な展開が起き  
そうだが、残念だが俺にはそれを対処する術がない。

魔術とか使えないから、バトルなんて専門外だもんな。

「まあそれなら大丈夫だと思いますよ」

「どうして？」

「逃げるからにはちゃんと足が付かない様にしてますし、それに悪魔からしたら、こっちの世界は人間  
しかない、いわば敵地ですからね。そう簡単に踏み込んで来れませんよ」

「なるほど……でもお前、魔王の娘なんてポジションじゃん。それ  
つて意地でも連れて帰るつとするんじゃないのか？」

「いや、それは無いと思します」

シノはきつぱつと言い切った。

「今は勇者との交戦中ですから、少しでも戦力が欲しい所でしきうし、転移魔術が使える様な高等悪魔を敵地のど真ん中に送る様な真似はしないと思しますけど」

そんなもんなんだろうか。仮にも自分の娘なんだから、意地でも連れ戻すと思うんだが、そこは人間と悪魔の考え方の違いだろうか。

「それに私はお兄ちゃんと違つて、連れ戻しても戦力になりませんから。だから父にも嫌われてましたし」

子供が自分の理想から遠いから嫌うつて、最悪な親だな。

まあ今回の場合、嫌つていたおかげで助かつた訳だが。

にしても勇者ねえ。本格的にファンタジーな世界だな。

「ていうか勇者と交戦中つて、人間は魔術が使えないんだろ? よく魔術が使える悪魔と戦えるな」

たとえ戦いのプロでも、魔術が使える相手と戦うとなると、相手にならないだろ? プロボクサーが戦車と戦う様なものだ。

「そんなこと無いですよ。人間には超能力がありますから」

「超能力?」

「はい、超能力です」

えーと、超能力っていうと、テレビとかでたまに特集が組まれて  
いる、あの胡散臭い奴か？

「えーっと……たとえばどんなのがあるんだ？」

「本で読んだのですと……念力だつたり……」

ああ、例の胡散臭い奴だわ。本当に超能力だつたんだな、アレ。

「あと、手から炎を出したり……」

パ、パロキネシスって、そんな漫画の代表的な能力を、リアルな  
人間が使えんのか！？

「とにかく色々ありますよ」

すげえな、人間にもそんな能力が備わってるのか。

となれば当然この事が気になつてくる。

「超能力って……俺にも使えるかな」

本当に存在しているつて分かつたら、やはり使いたくなつてきた。

パロキネシスとか使ってえな……いや、でもそんなもん使えたら  
家火事になりそうだな。もつと他の物が使いたい。

「それはちょっと分かりませんけど、可能性はあると思いますよ

「可能性ねえ……」

それは一体何パーセントくらいなのだらうか。

仮に俺が超能力に目覚めたとして、俺は一体どんな能力を使つことができるんだろうか。

「つで、こんなもん考えても仕方がねーよな」

考えたつて何か変わるわけでもない。いくら未来予想を立てたつて、それが現実になるなんて事はきっとないんだから。

「なあシノ。お前つて他にどんな魔術使えんの?」

俺は興味を超能力から、目の前に確かにある異能に向ける事にした。

「他の魔術ですか?」

「おう、他の魔術。なんかもつと……派手な奴

さつきも話題に出た炎を操るとか……あ、やっぱ炎は家が燃えそうだから勘弁してほしいな。

「あ、攻撃魔術とかは止めてくれよ」

炎だけじゃなくとも、攻撃系の魔術全般をこんな所でぶつ放した  
ら家所か、こじり一體が消し飛びそうだ。

「心配しなくとも私はそんな物騒な術式は使えませんよ。ほり、さつき戦力にならないとか言ってたじゃないですか」

ああ、言つてたな。

戦力外つて、てつきり戦う気が無いから使えないって意味だと思つてたけど、どうやら違つたみたいだ。

いや、違つては無いか。

シノに戦う気が無いのは事実だらう。

「ていうか全く使えないのか？ 魔王の娘なんだから、何かしら使えると思つたんだけど」

「はい、使えませんね。下級魔術ですから扱えませんから」

「まあお前が、町を破壊できるような魔術をぶつ放している所なんて、想像もつかないけどな」

「どちらかといふと、結界のような物で攻撃魔術から周囲を守つて、いる様なイメージがある。

「守る方なら得意なんですけどね。

予想通りだな。

「じゃあその守る術つて奴を見せてくれよ。肉眼で確認出来る様な奴」

俺がそうリクエストすると、シノは「ココと笑つて、

「分かりました。じゃあ私のとつておきの魔術を見せてあげます」

と、言つて立ち上がつた。

とつておきか。どんなのが出てくるんだろつか。

「じゃあ始めますよ」

シノがそう言つと、シノの足元に魔法陣が展開される。今度は黄緑色ではなく水色だ。そして回復魔術の時と同じように、外周を記号が埋めている。

静かに展開されていた回復魔術と違つて、僅かだが魔法陣から風の様な物が発生しているのが分かる。そよ風と言つた感じだ。

ああ、なんか扇風機の弱みたいで気持ちいい。

「こきますよ！ 大河さん、見ててください」

シノがそう言つて俺の方に右手を突き出すと、水色の半透明な壁が出てきた。

シノを覆う様に半ドーム状で形成されている。

RPGや漫畫だと結界とか言われている奴だ。

「す、すげえ。」

「これ凄く堅いんですよ。殴ってみます?」

「いや、それは遠慮しておくれ」

そんな壁を殴る様な真似はしたくない。だって手が痛いじゃん。

「ちなみに凄く堅いってどのぐらいだ?」

「殆どの攻撃を防げると思っていますよ。この一つ魔術だけが取り柄ですかから」

シノは笑つてそう言つ。

「……こしても本当にすぐえなこれ」

そんな事を呟き、結界を右手で触れる。

俺も……こんな力が使えたら良いのに。

そう思つた時だった。

「な……ッ!」

右手が急に熱を持つたと思つと、今度は軽い頭痛が俺の脳を襲つた。

しかし直に右手の熱は消え、頭痛も治まつた。その変わりと言わんばかりに、俺の頭に何かが流れ込んでくる様な感覚に見舞われ、その不思議な感覚に、俺は反射的に右手を頭部に伸ばす。

「なんだ……」「」

頭を抱えながら、今の状況を分析する。

流れ込んだのは記号の羅列、……魔法陣の外周に浮かんでいたアレと同じじゃねーか？

正確には記憶していなかつたけど、多分あつてこるはずだ。

なんでこんなもんが頭の中に……。

「だ、大丈夫ですか！」

シノが結界を解いて、慌てて駆け寄つてくる。

「別に痛いってわけじゃないから大丈夫だとは思ひつけどよ……」

とりあえずこの記号の事は、俺の知識だけじゃビビリこもならない。シノに伝えた方が良いよな。

「なあ……あの魔法陣の周りに書いてあつた記号……ってか文字？あれは何なんだ」

「あれは……魔術言語です

「魔術言語？」

「はい、やつですけど……」

魔術言語……やっぱり魔術関連か。

だとしたらなんで俺の頭に入ってきたんだ？

「あの……どうしたんですか？ そんな事を聞いて」

「流れてきたんだよ」

「流れてきた？」

「ああ、その魔術言語って奴が頭の中に入ってきたんだよ」

シノは俺の言葉を聞いて一瞬呆けるも、直に我に返つて唸りだす。しばらぐして、何か分かつたように口を開いた。

「大河さん……その魔術言語、まだ頭の中に残つてますか？」

今は入つてきているつて感じは終わつて、その魔術言語がぼんやりと頭の中に浮かんでいる状態だ。

「ああ、残つている。ぼんやりとだけどな」

それを聞いて、顎の下に手を置き、探偵の様に唸りだすシノ。

「大河さん、本当に仮説なんですけど……」

そう前置きして、シノは言つ。

「もしかして……今なら魔術が使えたりするんじや……」  
居間に沈黙が訪れた。

シノ、今、なんて言つたんだ。

魔術が使える? 確かにそつ言つてたよな。

でも、そんなの矛盾しているだ。

人間に魔術は使えない。俺と出会つた時に言つてたじやないか。

尚も俺の頭には魔術言語が存在している。

「大河さん…… その魔術言語を…… 選択してください」

「選択?」

なんだそりや。まるでゲームのウインドウから呪文を選ぶみたいだ。

「えーっとなんといつか…… その言語を使つーって感じでイメージをしてみてください」

「あ、うん。やってみる」

なんだかよくわからないが、全く知識が無い俺はシノに従うしか術がない。

選択…… 選択…… これを…… 使う…

既に頭に浮かんでいる魔術言語を必死にイメージした。イメージ

とこうよつ心に焼き付けるといった表現の方が正しいのかもしねない。

そして一瞬。体が軽くなつたような錯覚に陥つた。

「なんだ……魔法陣……？」

そして俺の足元には水色の魔法陣が展開され、辺りにそよ風が漂つていた。

そして魔法陣の外周には、さつきから頭に浮かび続いている魔術言語が記されていた。

「やひばつ……魔術……」

シノが呆気に取られたよひばつひばつ。

まさか使えるのか……あの結界を。

何故かはわからないが、使い方が分かる気がする。

結界を出したい方角にこの右手を突き出して、結界をイメージすればいい。

右手が震える。

つい数時間前まで、魔術や超能力なんて異能はフィクションだと思つていた。

それを、その異能を俺が使おうとしているんだよな。

「やべ……緊張してきた……」

なにせ使えるはずもない魔術を使おうとしているんだ。緊張位する。

……心の準備だ。深呼吸しろ。

息を吸って吐く。この動作を計二回続けて、

「よし……やるかー！」

俺は正面に右手を付ぎだす。

「……行くぞー！」

イメージする。やつを見たあの結界を。

刹那。俺の正面に、水色の結界が出現した。

シノの様にドーム状の結界ではなく、俺のは正面のみを覆っていてる。

「これは……結界……ですよね？」

「俺が……つかったんだよな

「みたい……ですね……いや、でも……」

シノは、まるで俺が初めて魔術を見た時の様に、目の前の状況を

把握しきれていないらしい。

使った本人である俺だつて、理由が全く分からぬ。

なんで人間の俺が魔術を使えたのか。

「大河さん、もしかして今の……超能力じゃないですか？」

シノがそんな事を言った。

「超能力って……」の結界つて魔術じゃないのか？」

「いえ、確かにそれは魔術ですけど……私が言つてるのはその前です」

「前？」

前つつーと、頭痛とか右手の熱とかの事か？

「あくまで仮定なんですけど、大河さんは私の魔術をコピーしたんじゃないですか？」

「コピー？ そんなのどうやって？」

「そこ」で超能力ですよ」

俺は自分の右手を見て、再びシノの方を見る。

「じゃあなにか？ 俺が魔術をコピーする超能力を持つていて、その力で魔術をコピーしたと」

「まあ、そうなりますね。といつかそれ以外考えられません」

「まてよ、それだつたら、

「じゃあなんで公園に居た時、俺は回復魔術を「ヒュー」出来なかつたんだ？」一応手も触れていただろ？」

足を治療していたと思われた回復魔術。実は全身に作用していたみたいだ。先日、晩御飯の調理中に左手の人差指にできた切り傷。ほぼ塞がっていたその傷は、綺麗さっぱり無くなっていた。どう考えても回復魔術の効果だろう。

「きっと何か能力を発動する条件があるんですよ。あの時と今、なにか違いはありませんでしたか？」

「なんだろう、なにか有つたか？」

必死に考える事、約十秒。

「あ、もしかして」

それっぽい違いを発見した。

「結界の時に俺、こんなのに使えてえなみみたいな事を考えてたんだよ。もしかしてそれじゃねえのか？」

「多分それですよー！」

「おお、マジでかー！」

欲しいと思えば手に入る。す、すげえ……。

まあ確証が持てないから、後でもう一回くらいいしノに魔術を使つてもらつて実験してみる事にしよう。

「やついえば……」

結界を張つた時から、少々気になつた事があつた。

「この結界で、シノのと比べてシヨボくないか?」

なんだか一回も一回りも小さい程小さい。体勢を低くしてやつと全身を隠せる程度の大きさ。大体直径で一メートル位だらうか。

あと何か色が薄い。なんといつか……脆そつだ。

「あれか? 経験不足つて奴かな?」

「強度なんかは術者によつて変わつてきますけど……大きさとかは変わらないはずなんですが……」

え、じゃあなに? なんでこんな事になつてんの?.

「これじゃあまるで劣化ゴペーじやん。

「もしかして大河さんの能力、ゴペーとかじやなく……劣化ゴペー?」

「言われたああああああつ!」

薄々自覚していても、他人から言わると心にザクッと来るものがある。

俺は肩をがっくりと落とし、

「ま、まあ。劣化コピーだらうと使えたことには変わりないし。人間が魔術を使える事自体が異常なんだから、きっと中身は劣化でもやつてこることは凄いはずだ」

ひたすら自分は凄いと言い聞かせた。

落ちついて考える、本当に俺は凄いんだ。ナルシスト的な意味ではなく。

「でも良かつたじゃないですか。超能力が使えて」

超能力って言つて良いのか、魔術って言つて良いのか分からぬけどな。

まあそれはどっちでもいい。

「そうだな。これで十分だよ」

結界を解除する。

発動時もそうだったが、今回も解除の仕方が何となく分かつた。

消そぐと思つたら消える。実に簡単な作業だ。

使い方が分かるのも、この能力の特性なのだろうか。

ちなみにこの結界。手を動かせば結界が追尾してくる。超便利そうだ。丈夫かどうかは別としてだ。

「そういえば、魔術を使うのに魔力とかそういうた類の物つて使わないのか？」

なんとなく気になつたから尋ねてみた。

RPGなんかだと、魔術を使うのにはMPなんてもんを使つたりするし、現実でもそうなんじやないかなと思うんだが。

「使いますよ？ 魔術は魔力を力に変えて使う術ですから」

「俺が魔術を使つたって事は、人間も魔力を持つているんだよな。人間は何に魔力を使うんだ？」

まさか宝の持ち腐れつて事は無いだろうな。

「超能力です。魔術と超能力の違いを大雑把に言つと、魔力の出力形式の違いだけですから」

出力形式の違い……ね。

「ところでシノ。さつきから頭の中に魔術言語が浮かびっぱなしんだが、何とかならないのか？」

こればっかりは消し方が分からぬ。

「うーんと……普通に魔術を使うのを止めようつて思えば消えると

思こまかよ

随分と簡単だな。簡単に越したことは無いが、もつと凝つてあった方がカッコイイと思つ。

「分かった……とつあえず消してみる」

「とつあえず、一旦魔術は止めよう……あ、すぐえ。綺麗やつぱり消え去つた。

「使おうと思つた時は使おうと思えばまた出てきまますよ」

「もつ一度使ひ……出でた。本当に簡単だなオイ。

そう思いながら、俺は魔術言語を何度も何度も出し入れした。

本当に、魔術が使えるようになつたつて事を改めて自覚する。

でもこれ……使う場面あんのかなあ。人前で使つたら騒ぎになりそうだし。

「騒ぎと言えば、シノの服装だ。

「そのまま街中を歩けば、騒ぎつづけより変なつわさが立つ。

「なあ、シノ。突然だけども、お前その服以外に服持つてきてねーの? その服じじゃ田立つだろ?」

魔術とかで四次元に収納とかしていないのか? そんな事ができるか自体分かんねーけど。

「えーっと、持つてないですね。そもそも私の居た世界とこっちの世界は衣服の文化が違うみたいですから、仮に持つていたとしても、こっちの世界じゃ目立つてしまつ様な服しかないですから意味がないと思います」

「ああ、そつか。そりゃそうだよな。  
でもどうしようか。」

「こんな状態で外に出すわけにもいかないし、かといって家から一歩も出さないなんて事はしたくないし。」

「しょうがねえ、姉さんの部屋から勝手に持つてくるか」

「どうせホームステイ中だ。バレやしない。」

「で、姉の服を着て、何かしらの服を買わせればいい。これが最善の選択だらう。」

「勝手に着ちゃつて大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ」

「……多分な。」

## ピフォーアフター

姉さんの部屋から、適当に服を持ってきた。

やはり勝手に部屋の中の物を押借するのは、少々気が引ける行為だったが、姉さんだつて俺の部屋に勝手に入つて荒したりしてたら、文句を言われる筋合いはない……と、言いたい物の、男と女は違うからな。なんとなく俺が悪い気がする。

そう考えると、罪悪感が沸いてくるな……まあ背に腹は代えられないから、仕方ない。

とりあえず俺は悪くないと、自分で言い聞かせよう。

もうすれぱ少し気分が楽になるはず。

俺は悪くない、俺は悪くない……よし、これで多分大丈夫だ。

さて、今回姉の部屋から押借してきたのは、カジュアルな洋服とスカートだ。

いかにも今風の服装と言つて良いだろう。

なんとなくこれに決めた。別に俺の好みは反映させていない……  
断じて反映していない。

そんな上下一式セットで手に、今の襖を開く。

「とりあえず適当に持つてきた」

綺麗に畳まれた衣類を、正座でくつむと座つてこるシノの前に置く。

「多分」「この着てたら、全然問題ないと思つ」

「な、なんか……カワイイですね」

「うん、可愛いと思つ。服に興味深々なシノが。

着替えたらどんなふうになるんだろうか。

可愛いんだろうな。

「あの、大河さん」

頭の中でイメージしていると、シノが声を掛けってきた。

「ん、なに?」

「あの、着替えたいんで……出でてもいいえると助かるんですけど……」

「あ、悪い」

俺は慌てて部屋から出た。

着替えたいつて事ぐらい察しろよ俺。

「ビ、ビリですかね。似合ひますか？」

アニメや漫画で定番となつてゐる様なラッシュキースケベ展開に陥る」とも無く、シノの着替えは終了した。

あれつて、現実でやると相当ヤバいと思つのは俺だけだろうか。仮に相手が他人だったら、起訴されるかも知れない。

まあそんな事は置いておいて、シノの着こなしこついてだが、

「す、凄え似合つてゐるよー。」

言葉に偽りはない。とにかく似合つていた。

これは後で姉さんに怒られたとしても構わない。そう思わせるほど似合つていた。

「そうですか、それなら良かつたです」

シノは万弁の笑みでそう言った。

「それにしても……これ、スカートが短いですね。こんなもんなんですか？」

「い、こんなもんだと思つ」

「い、これが普通だと思つ……普通だよな？」

もう一度言わせてもらひが、このチョイスに俺の好みは反映されてない。絶対にだ！

「……なんか恥ずかしいです」

シノはボソリとそんな事を言つ。

ま、まあ確かに、全身を隠す様なローブから一転、現代人御用達のスカート……いや、御用達かは男の俺には分からんが、とりあえず急に露出が多い服装になつたら恥ずかしいだろう。

「で、でも似合つてるぜ。大丈夫だ」

……なんにせよこれで問題はクリア……だよな？

「とりあえず、これで外を出歩けるな」

「そ、そうですね。少し恥ずかしいですが……」

シノは顔を少々赤らめてそう言つ。

なんというか……恥ずかしそうにしているシノ、可愛いなあ。

そんな事を考えながら、俺は部屋に掛けた時計を眺めた。

もう夕飯の買い物にでも行つた方が良い時間だ。

本当は医者の帰りに寄つて行こうと思つたんだが忘れてた。

「 なあ、今から買いた物行くんだだけビ、お前も行くへ？」

「 は、はー。私も行きますー。」

シノが元気よく主張する。

「 じゃあ決まりだな」

財布を手に取る。

「 じゃ、せつと行くぜ」

「 はー」

そういうふた会話を交わした後、俺達は家を後にした。

「わあ、人が沢山いますね」

「まあ、パートだからな」

おやらくシノにとつて初めてのお出かけポイントはパートとなつた。

そうだ……シノに服でも買つてあげるか。姉の服はいすれ証拠隠滅の為、元の場所に返さねばならないのだから。

俺がそつやつて今日の買い物計画を立てていると、

「あ、古川くんだー」

と、のほほんとした声が聞こえてきた。

「よひ、富野。奇遇だな」

富野茜。なんかのほほんとしていて危なつかしいクラスメイトだ。

「つて、古川君。いろいろとじづつしたの?」

「いじじじ?」

はて、何のことだ?

「足と隣の女の子の事だよ」

ああ、そうこうとね。

シノの事はなんて説明しておこうか。

「ああ。」  
「シノはシノ」

「初めまして、シノっていいます」

「うん、普通のあいさつだ。」

「ここに来る最中に、魔王の娘とか、そういう類の事の発言は禁止と釘を打つておいたのが効いたのだろうか。」

「何も知らない奴の前で悪魔とか名乗つたら死ぬからな。社会的に。」  
「私は宮野茜。よろしくね、シノちゃん」

宮野も血口紹介をする。

「それで、一人はどんな関係なの？」

宮野が興味深々な様子で聞いてきた。

「あ、これなんて言えれば良いんだろう。」

「……思いつかねえ。」

「えーっと、居候です」

と、シノがストレートな返答した。

ええ……そこは諂魔化してよ。そんな事言つたら面倒な事になりかねないじゃん。

「居候……古川君、なんか色々と面白い事になつてるね！ もしかして彼女さん？」

「う、ちがーよ。」

「そそそ、そつですよ！ そんな間柄じゃないですよ！」

俺とシノが必死に釈明する。

なんかシノの顔が赤い。

そりや恋人と勘違いされたら恥ずかしいだろ？。

「じゃあなんでシノちゃんは居候なんかしてるの？」

なんぞつて言われてもなあ。説明しようがない。

「そ、そんなことよりさあ、足の事とかの方が気にならねえか？  
全治一ヶ月が一週間で治つてんだぜ？」

苦し紛れで話をそらす。

「そうだ、足なんで治つたのー。一体どんなことつたら治つたのかな！」

ああ、富野が馬鹿で助かつた。

つて、馬鹿なのは俺も同じだった。

せ、説明しようがねええええええええええええ！

でも話を振つちまつたからこま、なにか話さないと……。

俺は冷や汗をかきながら、脳裏に浮かんだ事を口から垂れ流す。

「えーっと……公園で寝てたら治つた

いくらなんでも「これは無いだろオイイイツ！

自分で言つてなんだけビ、「これは無いわ。無理だわ。余計に話をややこしくするだけだわ！

「そつか、通りすがりのスーパーお医者さんが治療してくれたんだね」

富野が馬鹿で良かつたあ！

なんで納得してんだよ！ まあ誤魔化せたから良かつたけど。

こしてもこんな事を信じるなんて純粹すぎる。こりこりと心配になつてくるな。

それになんだ、スーパーお医者をひつて。日本語か横文字かビつちかにしろよ。

「あつと結君が聞いたら、闇医者凄げえ！ とか言いそらだね」

「ああ、スーパーお医者さん、闇医者なんだ」

寝ている人を勝手に治療していく闇医者。

なんだソイツ、危険人物すぎる。もし実在していたら、早々と出頭を希望するぞ。

「な、なんか危険な香りがしますね」

一応流れ上、お前がスーパーお医者さんポジションなんだけどな。

ちなみに、富野の話に出てきた結君というのは、俺の親友である篠原結城の事だ。富野とは幼馴染の関係になる。

「あとで結君に、古川君の足が治つたってメール入れとかないと」

「そりいや結城の奴、今頃何してるかな」

結城は何を思つたのか、夏休みを利用して自分探しの旅に行つてゐる。

アイツの行動力にはよく驚かされていたが、今回は今までと比べ物にならなかつた。

夏休み開始直前に『俺、自分探しの旅で全国回つてくるわ』などと言つたし、本当に実行しやがつた。

あの時は本当にビビつたが、まあ結城だから仕方ないという感じで諦めていた。

「それで、シノちゃんはどうして居候なんかしてこるの？」

お、覚えていやがつた！ まあ忘れていてくれたらくれたで、心配になるんだけども！

「なあ、畠野」

「ゴホン、と咳払いし、畠野の肩に右手を置く。

「世の中には……触れてはいけない事情が沢山あるんだ……分かるか？」

と、語りかける。

「な、なんだか良くなきゃならないけど分かった！」

「どうすだよ。

「まあ古川君はお人好しだからね。そつまつておもへる

「……まあそんな訳だ。じゃあ俺達そろそろ買い物済ませるから、もう行くよ」

「やつか。じゃあな、古川君、シノちゃん。また今度」

「ねへ、ひむ

「あ、また今度」

そんな言葉を交わし、富野は俺達の視界から消えた。

「じゃ俺達も行きますか」

「はい」

俺達はその場を後にし、衣服店へと向かった。

「なんだか服が沢山売っていますね」

「セリヤセリヤシコシ店だからな」

一階に位置する衣服店は、姉曰く『それなりに有名なブランド店』らしい。

二二二クロ商品と比べると、多少値が付くが、それでも良心的な値段設定になつてこる。

「ま、とつあえず好きなの選んでくれよ。金はある程度あるからさ」

どうせひの両親は、会社で結構な地位に立つていて、やの恩恵で、俺に振り込まれる生活費は、結構な額となつていて。

それに加え、二か月分の医療費が、足が直つたことによつて浮いた。

ある程度値が張る商品でも、数着ならなんどでもな。

そういうえば以前父さんにて、生活費も少しお下りしてもいいといふ事を伝えた際、

『お前位の年頃になると、彼女の一人や一人位できるだら。そういう時に金に困つてちやカツコ悪いだ』

と、俺の提案を却下した事があった。

まあシノは彼女ではないが、父さんの考えのおかげで今回は助かった。

そういうえば、彼女の一人や一人つて言つてたけど、一人だつたら二股だよな。

二股なんて修羅場になりかねん事はしねえよ。ハーレム物のラノベじゅあるまいし。

まあ二股がどうこう以前に、一人すらできないんだがな……残念な事に。

「じゃ、あつちの方見きますね」

そう言つてシノは、珍しい物を眺める様に、店内を進んで行く。

ま、自分の世界には存在しない衣服が沢山あるんだ。

そりゃ珍しがるよな。

「……れて」

シノがどんな服を選んでくるかは、後のお楽しみにして、俺も新しい服買つかな。

「お、これなんかいいじゃん」

個人的に気についた服を取り、値札を見る。

あ……やっぱ結構高いな。

いくら金があるつていつても、無駄遣いはいけないしね。

「……今度ヨーロ行くか

俺はそつと、手に取った服を元の場所に返した。

## 魔王ヒロシマ・ラムンケ（後書き）

なかなか話が進みませんね…… もう少しこんな感じのノリで続きます。

もしよかつたら感想を書いていただけると嬉しいです。

## 未知なる文化

結論を言つと、シノのセンスは良かつた。

上トニ着すつ衣服と、パジャマなどを購入した為、結構財布の中身が吹っ飛んでしまつたが、今まで余り使ってこなかつたお陰で、まだ結構な額が残つてゐるから、気にすることは無い。

……いや、流石に気にしないのは無理な話だ。

ＰＳ3買つた時以来だぞ、こんな出費は。

「あつがとつゝござました、大河さん」

シノが満弁の笑みを浮かべる。

「いいよ。この位、お安い御用だ」

まあ全然お安くはないんだが、シノの笑顔を見ると、お金のことはなんか別にいいか、とこう気分になる。

「さて、今日の晩飯何にすつかな

「私は何でも良いですよ」

楽しそうにそういうシノと、適当な会話を交わしながら、俺達は食品売り場へと足を運んだ。

その後、俺達は食品コーナーで晩飯の食材を購入して帰宅した。

今日の晩御飯は夏野菜カレーにすることにした。

我が家の中の夏場の定番メニューだ。

「手際良いですね」

「まあ慣れだよ、慣れ」

両親が居た時も、不定期に料理はしていたからそれなりに料理は得意だ。

「私にできる事って、何がありますか?」

「うーんと……今日ははちょっとねーかな。あっちの部屋でテレビでも見ててくれ」

「テレビ?」

「ああ、あの黒い箱だよ。近くにボタンが沢山ついたリモコンって奴が落ちてるから、その右上のボタンを押してみる。電源つくから」

「な、なんだか良くなかりませんけど……分かりました」  
「うちだよ。」

シノがスタスタとキッチンから居なくなつた。

さて、どんな反応をするかな。

「た、大河さん！　は、箱の中に、人が……ッ！」

テンプレ台詞を吐きながら、キッチンに掛け込んできた。

なんといつか……お約束な展開だ。

しかしこのお約束展開を、実際にお田に掛る日が来るとは、夢にも思わなかつたな。

その後も、未知なる道具。テレビにテンションが上がりっぱなしのシノを眺めながら、調理を進めていった。

「どうだ？　結構自信あんだけど」

「す、じくおいしいですよ」

カレーを作り終える頃にはテレビにも慣れた様で、テレビを見ながらの一般的な食事風景が食卓に広がつていた。

「それにしても……」じちの世界の化学力は凄いです。まさかこの

黒い箱がそんな凄い物だったなんて……」

わざと軽くテレビについて軽く説明した。

正直、テレビの事を知らない奴なんて初めて見たので、シノの呑み込みが良かつたのかどうかは分からぬ。

採点基準が分からぬからな。

まあ理解することに意味があるのであって、大事なのはスピードではない。

「ところで、テレビの前に置かれている白い箱はなんですか？」

と、言わざと知れたゲーム機を指差す。

「ゲームだよ。後でやってみるか？」

「はい、やってみたいです」

さて、テレビの時もさうだったが、シノがどんな反応をするか楽しみだ。

俺はシノの驚く顔を想像しながら、カレーを食べ進めた。

「す、凄いです。箱の中のキャラクターが思いのままに動きますー。」

田を輝かせながらシノがプレイしているのは、国民的アクションゲーム。

画面内では配管工のおっさんが、左から右へ走つて……あ、落ちた。

「あ、オジサンが……死んだ……ッ」

「なんで田をウルウルさせるほど、マ オに感情移入してんだよ。そんなプレイする奴初めて見た」

某番組で百人に聞いても、絶対タモさんストラップ貰えねえなこれ。もちろん該当者はゼロだらう。

その後、シノは何度もマ オを奈落の底に突き落としながらも、画面を進めて行つた

最初は感情移入がハンパなかつたシノだったが、今はなんだか楽しそうにコントローラーを握つてている。

そうだよ、これが正しいマ オの遊び方だ。感情移入していたら、冒険は進まない。

俺はそんな事を心の中で呟きながら、画面と、ゲームに熱中しているシノを眺めていた。

「そうだ、キリの良い所で、風呂入つてこいよ。沸かしてあるぞ」

「Jの連戦の途中に沸かしに行つたからな。いい感じの湯加減になつてゐるはずだ。

「あ、じゃあ先に入つても良いですか?」

「どうぞどうぞ」

そう言つてシノを部屋から送り出す。

家の案内は済ましたし、場所は分かるだらう。

「あ、そうだ」

そう言つて部屋を覗き込むシノ。

「……覗かないでくださいよ」

「O、覗かねーよー」

「いや、でも……Jの世界つて、覗くのが文化になつてゐるんじゃないですか?」

「なつてねーよー」

「だつて……」

と、シノは、茶の間に置いてあつた漫画雑誌を指差す。

「その…… そういう描[画]が沢山あつたから…… その」

「…… 漫画と現実を一緒にするのはいけない事だぞ」

まあ、今俺も漫画の主人公の様な境遇に立たされてるわけだが。

「それに、俺がそんな事する奴だと思つか?」

「そりゃ大河さんは、良い人だからそつは思ひませんけど」

「なら安心して入つてこい」

そう言つて送りだす。

まあ覗きたくないかと聞かれると、そこは男として勿論覗きたい訳だが、嫌われたくない。

女の子の風呂を覗いても、友好関係が続いて行くのは漫画の世界だけなんだ。

「しかし、異世界から来た奴が、よくこいつらの世界の本を読めるよな。これも魔術か?」

翻訳魔術とか使つてんのかな。これを「ペーしておけば英語のテストは楽勝だな。

いや、でも魔法陣とか出でたりしたら、確実に面倒な事になる。

そういうえば、今俺が使える結界だつて、使う場面が思いつかない。

まあ結界なんて使つ場面で巻き込まれたくはないに決まつた。

俺は魔術言語を呼び出し、結界を発動させる。

「結界は血口満足の為の力ってことか」

とりあえず結論づけ、しばらく黙った後、結界を消滅させる。

これを使つ場面は無い。

でももし使わなければならぬ場面が訪れた時、俺はちやんとこの結界で何かを出来るのだろうか。

「ま、考へても仕方がねえか」

さうこののはあつと、場面に立ちあつて初めて分かる事だ。今考えても何も変わらぬしない。

だから今俺がやるべきは「とにかく、キノコは何処かなつと

「わい、キノコは何処かなつと」

シノの為にマ オの残機を増やしておへことだ。

## フタリノ夜

時刻は十時を回っていた。

今日は色々な事がありすぎて、なんだか疲れが溜まっている。

それはシノも同じの様で、既に一階の空き部屋で眠っているはずだ。

「マジで漫画みたいな一日だったな」

俺はベッドに転がりながら、今日の事を振りかえる。

本当に、とんでもない一日だった。

異世界から来た魔王の娘と出会い、足直してもらって、その場の思いつきで言った提案で、今は一つ屋根の下。

なんというか……まるで主人公みたいだ。

「つても、能力の方は、全然主人公らしくないもんだけどな」

右手を天井の蛍光灯に翳す。

魔術を劣化させて自分の物にする能力。

少なくとも、主人公が持つような能力ではないだろう。

バトル漫画だと、主人公に倒される噛ませ犬の様なキャラが持つ

てそんな能力だ。

「そう考えると、なんかカッコ悪いなー、俺」

まあ、別に俺は誰かと戦つたりなんてしないから、噛ませ犬の様な能力でも一向に構わないが。

「とりあえず……寝るか」

疲れている時は、早めに寝た方が良いだろう。

ベッドの近くに置いてあった蛍光灯のリモコンを取り、蛍光灯を切る。

明るかつた部屋が一転して、碌に周りの物が確認出来ない暗闇へと移り変わった。

うん。やっぱり電気消すと眠くなつてくるな。

そういうえば、なんで明るい所より、暗いところの方が寝やすいんだろう。

……まあどうでもいいが。

変な事考えている暇があつたら寝よつ。その方が時間を有効に使つた感じがする。

と囁き声で、ゆつくつと田を瞑つた。

どれぐらい時間が経つただろうか。

だんだん眠くなってきて、もうすぐ寝につけそうと時計に、部屋の扉が開く音が聞えた。

「ん……なんだ？」

しかしあ、眠いので音だけじゃ状況を理解できなかつたんだが、音のした方に目をやると、直に状況を理解した。

「どうかしたのか、シノ」

扉を開けたのは、枕を持ったシノだった。

まあ家にシノしか居ないから当然なんだが、そういうた簡単な判断も出来ないほど、俺は今眠いということだろう。

「いや、あの……一人で寝るの……なんか怖くて」

怖いってオイ。シノが何年生きているかは知らねえけど、その姿で怖いってのは、なんとなく変な感じ……って待てよ？

よく考えたら、シノって兄が居なくなつてから、ずっと一人で居たんだよな。

その所為で一人で居るつてのがトラウマになつていいとか？

よくわからないけど……呑、よくわからないからこそ、此処はシノの意見を尊重させてやるべきではなかろうか。

「えーっと……それいつつまつ?」

「……今日まで寝かせて欲しこんですけど」

なんとなく答えが分かっていたが、どうやらそれは当つていた様だ。

「……いよ。俺のベッド使え」

「いや、私床で良いですよ」

「いや、いつ時に、床で寝るのは男って相場が決まってるんだよ」

……多分な。

確証は持てないが、俺の中ではそうなつてこる。

まあ、まあ。添い寝つて選択肢もあるが……いやいや、無く無い!

……考えたら恥ずかしくなつてきた。

「だから、お前は心補くベッド使つてく

「あ……ッ」

何か思ついたよ、そり声を擧げるシノ。

「どうした？」

「いや、大河さんのベッド広いから、一人で寝ても大丈夫なんじゃ  
……とか？」

と、吉川シノのはじか恥ずかしそうだった。

「い、いや。でもな……あんまりそういう事は、良くないと思つん  
だが……」

「でも……大河さんをベッドから追い出すのも気が引けますし……」

しばしの沈黙が訪れた。

や、ヤベ。俺なんて返答すればいいんだ。

YES? NO? 分かんねえよ、こんな状況になつた事なんか、  
十四年生きてきて一度もないもん。

ほ、ホントどうするよ俺。

あ、そういうや、わきシノの意見を尊重するとかいつ結論出した  
んだつけ？

……もうどうでもなれ！

「わ、分かった。シノがいいなら……別に良いけど」

は、恥ずかしくて熱でそつだ。

「は、はい！」

そして、何故自分から提案して、動搖しているんだ……やっぱ恥ずかしいのか？

恥ずかしいなら、最初から何も言わないでほしかったぜ……俺も恥ずかしいからよ。

俺は壁の方により、シノの寝るスペースを開ける。そして、俺が開けたスペースにシノが寝転がり、俺達は背中合わせの状態となつた。

「……大河さん」

シノが呟くよつと話しかけてきた。

「……なんだ？」

「……お、襲わないでくださいよ」

「お、襲わねえよー」

んな事しねえよ……多分。

……にしても、緊張感が半端ねえ。

眠気が一気に覚めちまつたぞ。

そんな俺とは裏腹に、シノの方からは、早くも寝息が聞えてきた。

「おーい、シノ。寝たのか？」

返事無し。やがて熟睡中だ。

「は、早いな……。

「とつあえず……俺も寝よつ

……！」  
「うん、俺は再び床を跳つ、うなづかれて意識を失う。そのままの状態で消え

そんな気配一切ない！

「じつは……全く眠れる気がしないで

さすがに……今からでも床で寝るか？

「やうじよ。そのままじや絶対眠れねえ

俺はやつて起き……せない！？」

寝がえりを打ったシノが、俺に抱きついてきた。

いや、男として嬉しいんだが、嬉しいんだが動けない。

つまづ、つまづだ。

「俺、もしかすると、今日寝れない？」

考えるビジネスとする予想だった。

朝、居間で朝食を食べている時の会話。

「あれ？ 大河さんクマ出来てますよ」

「ああ、やつ……？」

結局興奮が収まらず、気付いたら日が昇っていた。

今日からは何が何でも床で寝よう。

でないと……睡眠不足で死ぬ。

割と洒落にならない切実な問題だった。

シノがこちらの世界に来て、四日が経つた今日。

「な、なんか色々と凄い所ですね」

「アレ? シノちゃん遊園地初めて?」

俺は、シノと富野と共に遊園地へとやつてきていた。

発端は昨日携帯に掛つて来た、富野の電話。

『親戚の人ぐれたら、遊園地のチケットが三枚あるんだけど……古川君とシノちゃん行く?』

俺と富野は友人だし、シノもアレから何度も富野と会つていて、仲良くなつてゐたみたいだったから、俺は迷わずOKした。

これは憶測だが、チケットが三枚つてのは恐らく、俺と富野、そして結城の分だつたのだと思う。

小学校の頃から一緒に遊んでいるメンバーだから、親戚の人人が三人分用意してくれたのだろう。

「どうか、親戚の人に一言言わせてもらひつと、何故三枚じゃなく、一枚にしなかつたのかと言つ事。

富野と結城は、何となくいい雰囲気だし、そつと所に配慮してもよかつたんじゃないだろうか。

と黙つても、現在結城は自分探しの旅に行ってて、此処には居ない。

だからこそ、シノの分のチケットがあつたというわけだ。

まあ無くても、俺が買つんだが。

「それで、まず何に乗る？ ジュットコースター？」

「じゅつとこーすたー？」

「うん。あのレールの上を走つている奴だよ」

富野の指差す先には、乗客の絶叫を纏つて急降下するジュットコースター。

この遊園地は国内でもそれなりに有名な遊園地で、この遊園地のジュットコースターもテレビの絶叫アトラクション特集で何度か取り上げられた事のある、有名なアトラクションだ。

前に来た時に乗つたが……テレビで紹介されるだけの事はあるな、とこつ出来だつた。

「な、なんだかとんでもない乗り物ですね……」

シノの顔が引きつっている。

まあ……無理も無い。

「あ、もしかして怖い？」

富野の問いに、「クククと首を縦に振るシノ。

……言わせてもらいうと俺も怖い。

なんとか結城と富野は、いついた絶叫系の乗り物が大好き  
らしく、俺も良く付き合わされた。

だから知っている。

「怖いのを楽しむのがジョットースターだよー！」

「あ、ちょっと。ほ、本当に乗るんですか！」

俺の友人一人は、例え嫌がっても無理やり乗せる。

「古川君も乗るよね？」

「断つても無理矢理乗せるんだろう？」

俺は少々ため息をつきながら、シノの手をグイグイ引っ張る富野  
について行つた。

「……な、なんか暴走したドラゴンに乗つている様な感じでした」

「それがどんな物かは分かんねえけど、確かに「レはとんでもない代物だ」

何度乗つても慣れねえ。

まあ、楽しい。楽しいが、尋常じゃなく怖い。

「暴走したドラゴンって、また面白い感想だね。シノちゃんは想像力豊かだねー」

一人元気な宮野。

「イツは化け物か?

その後も色々なアトラクションに乗つていく中で、いつの間にかシノも絶叫系を好むようになってしまった。

そんな訳で、乗るアトラクションの比率が絶叫系多めという風になってしまつて、ヘロヘロになつた俺は、つい先程休憩案を提示した。

まあ一人も疲れていたようで、その案は簡単に通過した。

というわけで俺は、近くの売店に飲み物を買いに行つて、現在その帰りだ。

やつぱこいつのことは男の仕事かね……一人で三人分持つのは大変だな。

「にしても次は何乗んだろ」

ここの遊園地は絶叫系が多い。

まだ乗つていらない絶叫系アトラクションも多々あるので、この先の展開はなんとなく読める。

「つて……何やつてんだ？」

一人が休んでいる地点に戻つてきた俺の視界には、いかにもチャラい、多分高校生位の男二人と、そんお対応に困つてている一人が居た。

中学生相手にナンパとか……ここのロリコンビもめ。

いや、中学生好きはロリコンの対象に入るのか？

冷静に考えると、中学生は入らないな。うん。

つて、そんな事はどうでもいい。助けに入らねえと。

俺は近くの空きテーブルに買つてきたジュースを置き、駆け足で一人の元へと向かつ。

「あ、大河さん」

シノが「ひりひりに氣づいて、名前を呼んだ。

「あ? んだてめえ」

「ひさに凄えガンを飛ばしてくるチャラ男A  
つて、ひつこう場面つて「あつ、男連れかよ」とか言つて、引いてくもんじやないのか?」

「ハイツら俺の連れなんで……どつか行つてもりえませんか?」

「んだと「ハイ!」

なんといつか……絶対に話しが通じないタイプだな……外見がチヤイ癖に、口調はテンプレな不良だし。

……もうなんか面倒くせえ。

俺は魔術言語を脳内に巡らせる。

発動させるのは、結界の術式ではなく、もつと違った術式。

一昨日から、俺は日常生活に役立ちそうな魔術つてのを身に着けたくて、いろんな術をシノに使ってもらつて、それを「ハイ……いや、ラーニングして自分に取りこんでいた。

ちなみにラーニングと呼んでいる理由は、その方がカッコいいからという以外、理由は無い。

まあ……その辺はビリでもいい。

魔術をラーニングしている際に分かつた事だが、覚えられる魔術の数は無限ではなく限界があるようで、その数は三つ。

一つは、結界魔術。

使いどころが無いが、初めて使った魔術だから愛着が会つたから、まだ持つている。

二つ目は、回復魔術。

単純に、怪我した時に便利だと思ったからだ。

そして三つ目。

「本当にどつか行つてくれませんか……ね！」

俺は三つ目の魔術を発動させた。

魔法陣は出ない。

これもラーニングしている際に分かつた事だが、魔法陣というのは、大型魔術を使うための補助として、術式の一部に取り組まれている物らしい。

そして今俺が使つた魔術は、中級魔術。よつて魔法陣は出現しない。

「な、何だコイツ！」

チャラ男達が後ずさり、そして逃げ出す。

「どうやう……俺の発動した威嚇魔術は成功したようだ。

シノの話しだと、威嚇魔術は下級悪魔程度の奴らにしか効かない様な物らしい。

それを劣化して使つていい訳だから、通じるかどうかは分からなかつたんだけど、どうやら劣化してもチャラ男程度には効くらしい。

「あ、ありがと。古川君」

あまりに呆氣なく逃げて行つたチャラ男達に少々首を傾げながら、宮野が俺にお礼を言つ。

「ありがと。ごめんなさい、大河さん」

シノも安心したように、俺にそう言つ。

そんなシノに、俺は宮野に聞えない様に声を掛ける。

「……なあ、なんでお前魔術で追い払わなかつたんだ?」

「いや、あの……動搖して頭から抜けてました」

「……魔術持つてゐる意味ねえな」

攻撃魔術を使うことができないシノにとって、数少ない抵抗手段だろうに、それが頭から抜けるとか……ホント、悪魔って感じしね

えよな。

「あ、そうだ。ジュース、ジュース」

俺は空きテーブルに置かれたジュースを取り、再び戻ってきて二人に手渡す。

「ありがと、古川君」

「ありがとうございます」

二人は再び俺に礼を言つ。

「で、次何乗んのか決めてんの?」

「あれ!」

「あれです!」

一人が同時に指差したのは、空高く聳えるフリーフォール。

嫌な予想が的中した瞬間だった。

シノが俺の家にやつてきてから、早くも一週間が経過した。

俺が魔術なんて異能に慣れてきているのと同じように、シノもこつちの世界に随分と慣れてきた様だった。

いや、もう慣れたなんてレベルじゃない。もう立派なこつちの世界の住人だ。

「本当にこつちの世界に馴染んだよな、お前」

夏休みのバラエティー特番を見ながら俺が言った。

「はい。こつちの世界は楽しいですから」

楽しんでくれているようでなによりだ。

あれから、シノはよく富野と遊んだりしてる。

そんな様子を見ていると、シノが悪魔つて事や、ヤバイ所に居たつて事情が頭から抜けて行く。

実に平和だ。

「そうだ、大河さん。この辺に広くて人の居ない建物つて無いですかね？」

シノがそんな事を聞いてきた。

「そんな事聞いてどうするんだ?」

「ちょっとやりたい事がありまして」

「やりたい事?」

「人探しですよ」

「人の居ない所で人探しって」

「そこまで言つて気が付いた。

「あ、もしかして魔術とかが絡んでるのか?」

「はい。その手の術を使いたくて」

「それって、ここじゃ出来ないのか?」

今までだつて、結界や回復魔術を家の中で使ってたし、今回もうすればいいんじゃないのか?

「その術が、随分と大規模な術でして、広い場所じゃないと使えないとですよ」

「なるほど……あ、でもそれならセ」

「ふと思いついた。

「懶々そんな所に行かなくても公園とかで、えーっとなんだっけ、

人払い？ あれを使ってからやればいいんじゃねーの？

シノが熱中症で倒れた俺の看病をしてくれた時、シノは人払いを使っていた。

あれを使えば身近でも大規模な魔術を使えるのではないだろうか。

「あ、それは無理です」

「なんで？」

「人を探す術と人を避ける術。相性が凄く悪いですから」

あ、魔術に相性とか有ったんだ。初耳だ。

「で、なんで人探しなんかしようと思つたんだ？」

「最近、ちょっと茜さんが困つてるみたいなんで」

「え、宮野が？」

なんだろう……って考えなくともなんとなく予想が付く。

「あれか、結城の事か」

「はい、そういうのです」

最近結城からの連絡が途絶えている。

俺の携帯にも、宮野の携帯にもだ。

俺は、どつかで携帯でもぶつ壊した揚句に、俺達の連絡先が分からなくなつたと踏んでいるけど、やつぱり心配だ。嫌な予感はしてたんだよな、中学生で自分探しの旅とか。

「それで、結城を探すために、そういう場所に行きたいって事か  
かと」「はい。これで無事を確認して、何らかの方法で茜さんに伝えよう

何らかの方法ねえ……俺の方に電話が来たつて事にしておけばいいか。

「まあ分かってたよ。」つ心当たりのある場所があるし、連れていくよ。」「ありがとうございます」

本当に向やつてんだからな、結城の奴。元氣でやつてりや良いけ  
ど。

「ここで大丈夫か？」

「はい、此処なら大丈夫です。ありがとうございました」

次の日、俺達はとある施設の廃墟に来ていた。

ここは元々ゲーセンやバッティングセンターなどが揃つたアニメーションパークだったのだが、駅から二十分という立地条件の悪さなどの関係で、今は営業しておらず、立ち入り禁止の廃墟となつてゐる。

「ここなら人もいないから、人払いの術を掛ける必要はないはずだ。  
いや、礼を言いたいのはこいつだつて。結城は俺の親友でもある  
わけだし」

ほんと、世話を焼かせやがつて。

「じゃあ始めますよ」

「おつ、頼む」

シノは紫色の魔法陣を展開させる。

シノに聞いた話によると、魔法陣の色は魔術の系統で変わるらし  
い。

回復系だつたら黄緑、身を守る魔術なら水色と言つた感じだ。

シノは両手を地面に手を置く。

「うお…… すげえな……」

田の前に巨大な円形の地図の様な物が現れた。

映つてゐる人が動画の様に鮮明に動いている。

今映つてるのは、この辺りの地図だろつか。

「すげえ……けど、どうやって結城を探すんだ？ なにか手掛かりでもあるのか？」

「手掛かりなんて要りませんよ。探したい人の顔さえ分かれば見つけられますから。もう『写真で確認済み』です」

「す、凄いなオイ」

「いろんな魔術を見てきたが、これはその中でも凄い部類に入るだろ？」

「私の探索魔術は普通の探索魔術とは違うんです」

「違つて言つと？」

「普通の術は、対象の魔力を探知することで探し当てる物ですから、魔力が小さすぎたり、探知出来ないほど離れている人とかは探せないんですよ。そもそも対象者の魔力を知つておかないと使えないのでも、結城さんと会つたことのない私では、普通の魔術では探せません」

「ん」

「じゃあお前の魔術は、容姿で探すから、魔力が小さくて離れている奴でも普通に探せるって訳か」

「はい、そういうことです。多分日本国内位なら探せると思っていますよ」

国内全域つて、いくらなんでも凄すぎだろ。

シノ曰く、戦えない分、ついつ方に才能が向いてるらしいとの事だが、いくらなんでもこれは凄すぎる。これが魔王の娘の力か。

「あ、見つけましたよー。」

「え、もうかよー。」

は、早えよー。

床に映る映像を覗き込む。

「本当だ……確かに結城だ」

元気そつこ歩いてやがる。じつちの氣も知らずにみつけ。

「でも良かったです。これで西さんを安心させ」

シノがそこまで言つた時だった。

「え……はあー?」

田に映つた光景に、思わずそんな声が漏れる。

「な、何が起きた?」

「わ、分かりません! でも、なんで……」

シノも随分と取りみだしている。それも当然だらう。

「ゆ、結城が……消えた？」

何の前触れも無く……消えた。

映像から、跡形も無く。まるでそこには居なかつたよつた。

「ゆ、結城さんは、テレポートの能力でも持つてゐるんですか？」

「もつてねーよー。仮に持つていたとしたら、アイツの事だから俺や富野に自慢しに来るはずだ！」

じゃあなんで消えた。一体何が起こつてゐる。

「と、とにかくもう一回探してみます。どこかに移動したとしても、探せば見つかるはずです！」

そう言つてシノは再び探索を開始した。

「おい。少し休んだ方がいいんじゃねーか？」

「大丈夫です。まだやれますから」

もうあれから一時間が経過した。結城はまだ見つかっていない。

「無理しなくていいんだぞ。結城はお前からしたら赤の他人なんだ

からや」

「大河さんや茜さんには普段からお世話をなつてますから、これ位やらないと

なんとまあ、律儀な奴だな。

……俺に何か出来ることはあるだろ？

「なあ、なんか喉とか乾いてないか？ なんなら買つてくるけど」

「お願いして良いですか？」

「ああ。俺も少しは役に立ちたいし」

「どうかそれぐらいしか出来ないし。

」の魔術をラーニングして手伝つて手もあるけど、シノが使うオリジナルの術式でもなかなか見つからないんだから、劣化コピーの俺の術式でどうにかなるとは思えない。

「じゃあオレンジジュースをお願いします」

「任せろ。速攻で買つてくる」

やう言つて軽く駆けだす。

「」から「」まで大した距離は無い。自転車を飛ばせば往復十分だ。

「さて、結城は見つかったかな」

あれから十五分後。俺は再び先程のアリコーズメントパークへとやつてきた。

右手にはコンビニのビニール袋がぶら下がっている。中身はオレンジジュースのペットボトルが一つと、適当にチョイスしたクッキーだ。

俺はそれらを持って廃墟の中へ入った。

「にしても懐かしいな」

何回か結城や宮野と来た事がある。

最後に来たのは去年の夏休みの中盤だ。たしか此処が潰れたのはその後だったと思う。

俺が懐かしさに浸りながら歩いている、その時だった。

上のフロアから、轟音が響き渡った。

「な、なんだ！」

な、なにかあったのか？

「シノ！」

俺はシノの名を叫び、走りだした。

クソ、なんだかしらぬーけど、大丈夫なんだろうな！

階段を上り、次の階段に向かいまた走る。

シノが居るのは最上階のホールだ。

俺の前に最後の階段が聳え立つ。

流石にもう息切れが激しい。

でも此処を登ればシノの元に行ける。

「気合い入れろ！」

俺は最後の階段を全力で登り切り、ホールへと向かい最後の疾走をした。

そして辿り着いたホールで目に映つた異様な光景に、俺の手からビニール袋が滑り落ちる。

ホールから探索術式は消えていた、その代わりに発動している別の魔術。

「シ……ノ？」

シノの足元には黄色の魔法陣が展開している。

シノから教えてもらつたから知つてゐる。黄色の魔法陣の属性は拘束だ。

その証拠に、シノは立ちながらぐ玆つたりと氣絶してゐるようだつた。

当然の事だが、これはシノが自分で掛けた魔術じゃない。

これもシノから教えてもらつたのだが、魔法陣には一種類ある。術の使用者の周りに展開される魔法陣と、回復魔術などで対象者に展開する魔法陣。

見た目はほぼ一緒だが、全く別物だ。

前者は魔術を発動する際の補助。後者は、特定の対象に掛けるタイプの上級術式の、いわば効果範囲の様な物。

シノにこの魔術を掛けている奴は分かつてゐる。

「やあ、キミはソレの知り合いなのかな？」

足元に黄色の魔法陣を展開している、出会つたばかりのシノと同じ、異世界ファッショソを身に纏う青年。

……犯人は絶対にコイツだ。

「何やつてんだお前！ 一体どこのどこつだ！」

「おやおや、聞いているのは私なんですけどねえ。良いでしょ。他人に名前を聞くときは自分から名乗れっていうのは人間と悪魔の共通の常識ですからね」

悪魔……追つ手は来ないんじゃなかつたのか。

「私は魔王様の元で四天王をやらして頂いております、アルシエルという者です。以後お見知りおきを」

「四天王……ツ」

明らかにヤバそうな奴じやねえか。

なんでこんな奴が此処に……ツ。

「IJKちの世界に何しに来たんだ」

俺はアルシエルの様子を窺うつよつて、そつ尋ねる。

「おやおや、私が名乗ったのに、あなたは自己紹介無しですか。…まあ良いでしょ」

アルシエルは不気味な笑みを浮かべる。

「回収しに来たんですよ」

「回収?」

「アハ……ソレの回収です」

アルシェルは不敵な笑みを浮かべてそう言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4305ba/>

---

劣化の魔術師

2012年1月14日23時01分発行